

ふくらむ国際協力への夢

国際経済学科・狐崎ゼミOGに聞く

外務省専門職員としてパナマへ—佐藤香子さん

世界を知り、日本を知る。経済学部国際経済学科では、日本の国際経済関係を明らかにするとともに地域研究や比較研究を通し、世界のさまざまな地域への理解を深める学習を目指す。国際協力論、NGO論、海外特別研修など多彩なカリキュラムは好評だ。国際社会で活躍する卒業生も多い。外務省専門調査員試験に合格し、パナマ勤務が決まった経済学専攻博士後期課程3年の佐藤香子さんと国費留学生としてメキシコに渡る今年卒業の岡崎真依子さん(いずれも狐崎知己ゼミ生)に、国際協力への夢を聞いた。



左から岡崎さん、狐崎教授、佐藤さん
(研究室で)

佐藤さんは大学院で、地域社会開発と国際協力を研究している。中米グアテマラ先住民のマヤ民族に焦点を当て、同国には学部、大学院を通じて3回来訪した。中でも極めつけは修士時代、ケクチ・マヤ民族の村落に1か月間、単独で滞在した時だ。その様子は、発展途上国での活動が豊富な狐崎教授をも驚かせた。

同国では軍事政権下、1960年から96年まで36年間に及ぶ内戦が続き、先住民の大量虐殺が行われた。佐藤さんが訪れたのは内戦の終結間もない時期で、現地はその影響が色濃く残る。寝袋一つで村長宅にホームステイ。「スペイン語が通じず、通訳してくれる村人を探すのに苦労しました」。体中の虫刺されに悩まされ体調を崩し、抗生物質を飲みながら頑張ったという。しかし、そんな苦労を『『これが当たり前』の生活』と自分に言い聞かせ、現地に飛び込んだおかげでマヤコミュニティの真の姿を見ることが出来たと思います。何よりも日本の農家と変わらない生活が営まれている。なんだ、故郷の水沢(岩手県)と同じではないかと。フィールドワークの大切さを知ると同時に「故郷や農業への思いも変わった」と言う。

7月から2年間の在パナマ日本大使館勤務で、大学院を休学するが「違ったフィールドで、研究の幅を広げたい」と意欲を持つ。パナマ先住民のコミュニティも「ぜひ訪ねてみたいですね」。グアテマラの日本大使館では、ゼミの先輩(国際経済学科1期生)の大澤武志さんが昨年末から同じく専門調査員として勤務しており、交流も楽しんだ。

メキシコ政府国費留学生に決まった—岡崎真依子

岡崎さんが目指すのは環境教育。3年次在学中、春期留学プログラムでメキシコに渡った。豊かな自然、明るい国民性に加え、インディヘナ(先住民)とスペインの文化が混沌とする多様性に触れ、その魅力にとりつかれた。スペイン語を身につけようとメキシコシティに長期留学もした。数回の訪問で興味を持ったのがゴミ問題だ。「特に家庭ゴミの処理の仕方は秩序がなく、家の周りや河川に平気で捨てているのを目の当たりにしました。ゴミ問題は個人の意識変革に加え、政府と企業の協力のあり方も大事。難しい問題ですが、何らかの形で貢献出来ないものかと思いました」。

卒論は、「水資源の循環 トイレからのアプローチ」で環境問題に取り組んだ。念願だったメキシコ政府の国費留学試験に合格。8月から1年間、メリダのユカタン自治大学で学ぶことになった。「じっくり勉強し、ゴミ処理に有効で面白いアイデアを考えます」といたずらっぽく笑った。

「国際関係論」が担当の狐崎教授は「国際経済学科は、世界にチャレンジする学生にチャンスを与えるところ。それをフォローするのが我々の役目ですが、学生一人ひとりの潜在能力は高いと思います。勇気をもって踏み出してほしいですね」とエールを送っている。

05年度(平17)長期交換留学生

英語圏、スペイン語圏8人に留学許可書授与

05年度長期交換留学生のうち、英語圏とスペイン語圏への8人が決まり、5月12日、生田キャンパスで留学許可書授与式が行われた。

ダブリン大に留学する国際経済学科の浅川聖さんは「周囲には、多くの留学経験者がいて、その人たちのモノのとらえ方や考え方に魅力を感じ、高校時代から留学に強い関心を抱いてきました。アイルランドを選んだのは、英・米は留学者が多いことと、ダブリン大が優秀な大学だからです。留学後は勉強だけでなく、課外活動にも積極的に参加するつもりでいます。この機会にさまざまな異文化を体験し、肌で感じてみたい」と抱負を語った。

第12回国際交流OB・OG会総会・懇親会

俳優の尾崎さんが映画体験談を語る

在学中の留学体験者や国際交流活動を推進した人たちが中心となって卒業後も相互の親睦を深めている国際交流OB・OG会の総会と懇親会が5月21日、神田キャンパスで開かれ、卒業生24人、在学生9人が出席した。

宮本正幸代表(89年ネブラスカ大学リンカーン校留学)が「本会を大きくしていくことよりも、構成員のネットワークを利用して個々の成長に役立ててほしい」とあいさつ。

続いて、俳優の尾崎英二郎さん(平3経済)が『ラスト・サムライ』ほか、出演ビデオを上映しながら「なぜハリウッドに勝てないのか？」と題して解説と体験談を語った＝写真。

初めて参加した在学生は「留学経験を生かして活躍する先輩方の話がとても参考になりました」と感想を述べた。そのあと懇親会も開かれ旧交を温めた。



《留学生からのメール -2-》

—独マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルクに留学中の大久保 渉さん(文4)

気さくに話しかけてくれる人々

3月から国際交流協定校のマルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク(ドイツ、以下ハレ大学)に留学しています。一昨年も夏期留学プログラムで同大学に留学しましたが、今回は1年間なので、より多くのことを学びたいと思っています。

ハレ大学は、ドイツの東北側に位置するザクセン・アンハルト州のハレという街にあります。名前の由来は、宗教改革で知られるマルティン・ルターからきています。街は情緒豊かな古い建物に囲まれていて、キャンパスもその一つひとつが街の歴史と同化してとても美しいです。少し離れたヴィッテンベルクにもキャンパスがあり、この街も同様に美しく、世界遺産の一つとしても大変有名です。

大学ではさまざまな専門があり、とりわけ面白いのはjapanologieと呼ばれる日本学専門の学科です。日本の社会、歴史、宗教、日本語会話などが扱われています。ドイツ人が日本や日本語について一生懸命に学んでいる姿を見るのはなんとも不思議で、面白い光景です。

ドイツ語でのやり取りに加え、文化の違いを理解することは大変です。ここの生活はのんびりしているような気がして、せっちな私は、落ち着きません。今は苦労が多いですが、徐々に生活の良さが見えてきました。土地柄なのか、人々は気さくで、道を歩いていると挨拶をされ、話しかけてくれたりします。公園で寝ていたら、知らないおばさんにドイツ語で話しかけられ、長時間話し込んでしまったこともあります。

留学は先が長く、何があるか分かりませんが、ここでしか学べない多くのことを吸収していきたいと思いません。

